

古典を主体的に読むための指導法の研究Ⅳ

—「推論する」活動を取り入れた漢文指導の実践—

浜岡 恵子 ・ 山元 隆春*

要約：本研究の目的は、漢文学習に推論する活動を取り入れることが、学習への関心・意欲を高めるのに効果的であるか、また、漢語の構成を理解することが漢文を訓読する際に有効にはたらき、情景理解にかかる内容理解を促すことに繋がるか、という2点について検証することである。示された白文を読む際に、「推論する」学習活動を行わせることで、生徒は作者の心情や行動を自分の言葉で自由に表現しようとする意欲の高まりが見られた。また、単元のはじめに漢語と和語の構成の違いを理解する学習を取り入れることで、意味だけではなく、はたらきに目を向けて漢字を読もうとするようになり、漢文を訓読する際に語と語の繋がりを意識し、情景の理解を助けることに繋げることができた。

キーワード：漢字、白文、推論する、漢語の構成

I. 研究の経緯

小・中学校国語教科書の改訂（平成 23・24 年度）に伴い、「伝統的な言語文化」に関連する教材が増えている。これは単に量が増えたということではなく、指導の充実を求められているということである。児童・生徒が読むべき「伝統的な言語文化」としての作品群は、けっして遠い昔に書かれた（語られた）だけのものではない。誕生から長い年月をかけて、人々がその美しさや面白さを繋いできた現代の作品なのである。しかし、実際には古語や文法のわかりにくさなどさまざまな理由で、現代に生きる自分とは遠く隔たったところにあるものとのとらえが、中学校・高等学校の生徒達を古典から遠ざけている。漢文に限れば、さらに漢字や漢文独特の言い回しが壁となり、なおさらその傾向は強まる。

昨年度と今年度、本校第3学年生徒を対象にした漢字及び漢文学習に対する意識調査(2013年7月79名, 2014年7月79名実施)を行った。生徒は、それぞれの質問に対して「4 大変そう思う」「3 そう思う」「2 あまり思わない」「1 まったく思わない」の4段階からあてはまるものを選んだ。回答の平均は、図1のようになった。

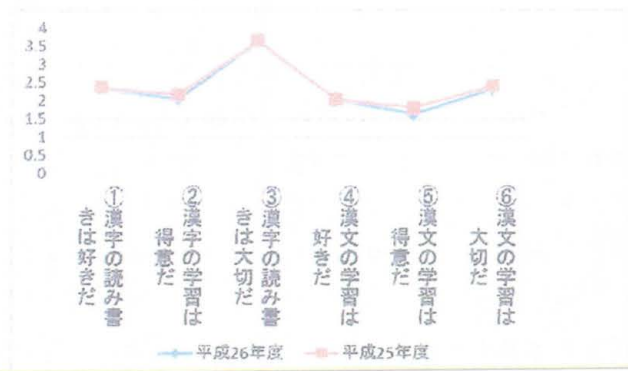


図1 漢字・漢文学習に対する意識調査

昨年度、今年度とも生徒の実態はほぼ同じ結果であることを示している。今年度も「漢字の読み書きが好きか」という問いには「大変そう思う」「そう思う」と肯定的に答えた生徒が46.8%いるものの、漢文学習となるとその割合は27.8%にとどまっている。さらに、学習の必要性についての調査結果では、漢字学習について実に93.7%の生徒が「必要である」と回答をしているのに対して、漢文学習の必要性を肯定的に回答した生徒は40.5%にとどまる。漢字学習の必要性については、「将来、社会に出て困るから」「日常生活で使えないと不便だから」

*広島大学大学院教育学研究科

と現在及び将来にわたって、生活の場面で自分自身が活用するイメージをもつことができている。一方、漢文学習の必要性を肯定的に回答した理由は「昔の人の考え方がわかるから」「文化の一つだから」というものであった。大切な視点ではあるが、自分の生活との繋がりという意識は薄いように思われる。これらの実態を見るにつけ、「将来使わない」と回答した生徒にこそ、自分達の生活や文化との繋がりを認識させ、学習の意義や有用感をもたせたいものであると考えてきた。

II. 研究の目的

昨年度までの東雲小・中の国語科の授業実践より、『伝統的な言語文化』には、今を生きる児童・生徒があまり見聞きしない独特の言い回しや表現、その時代に生きていた人の考え方や価値観が存在している。それらを思考力・想像力をはたらかせて児童・生徒に新たな発見として気づかせたり、表現活動と結びつけながら現実の生活感や生き方とかかわらせたりすることで、『伝統的な言語文化』に親しむ態度が培われていく。(浜岡など, 2013) という結果を得た。

漢字の習得は、日本語を用いるすべての学習の根幹となることは言うまでもない。しかし、習得した漢字を日本語を正確に読むこと、書くことをゴールとしていたのでは、漢文学習に向き合う意義や必要性は見いだせないままになってしまう。かつて漢字が日本に伝来した際、先人たちは苦勞と工夫を重ねながら、日本語を表現する文字として漢字を取り入れた。今回の指導では、それと逆の経緯を辿るようにして、既習の知識を用いて漢文を読み解くことに向かう場を作る。その際に鍵となるのが、思考力・想像力をはたらかせて「推論する」活動を学習に取り入れることである。そこで、本研究の目的を次のように設定した。昨年度に引き続き、漢文学習に推論する活動を取り入れることが、学習への関心・意欲を高めるのに効果的であるか。また、今年度、漢語の構成を理解することが漢文を訓読することに有効にはたらか、内容理解を促すことに繋がるのではないか。以上の二点について検証する。

III. 授業実践

1 教材について

漢文は、簡潔さとリズムの美しさに特徴がある。原文のまま中国語で読む時はもちろん、訓読文にかえて日本語で読む時も、和語で綴られた古文とは異なる趣を味わうことができる。漢文にもさまざまなジャンルがあるが、簡潔さとリズムの美しさが凝縮されている点で、漢詩はたいへん優れている。その中でも、今回の教材として取り上げる中国唐代にできた新しい詩(唐詩)は、李白、杜甫といった詩人に代表されるように、日本でもなじみ深い詩が多い。唐詩が、特に読み継がれてきたのは、「句数・字数・構成・対句・押韻などの制約を設けることによって、緊密な構成と音律的な美しさを意識的に作り出そうと腐心した」(大上, 2013) というように、形式、内容ともに完成度が高いからである。今回、教材として選んだ高啓「尋胡隱君」と王之渙「登鶴鵲樓」、王翰「涼州詞」は、古くから日本人にも親しまれている。用字や技法の面で、絶句の基本を忠実に守り、対句や押韻が見事に配置された作品である。さらに、用いられている漢字が中学生にとってもあまり難しくないことから、白文で示しても生徒が推論するための情報が十分にあると言える。内容の面から言うと、詩のテーマは3作品それぞれに違うが、中国ならではの雄大な景色と細やかな心情の表現が見事であり、時代や国を超えて、作者と現代に生きる私たちを結ぶ共通の感性があることを思い起こさせる作品である。以上の理由から、今回の学習教材として適切なものであると考えた。

2 指導方法について

本校第3学年2クラス(79名)を対象として、以下に述べるようなA指導とB指導、2種類の指導を試みた。

指導の具体的な方法として、まず、両クラスの生徒に漢文訓読のきまり(返り点、置き字、再読文字等)について指導した。

次にA指導では、「推論する」活動を学習の中心に据えた指導を行う。具体的には、絶句四句のうちいくつかの句を伏せておき、自分が作者ならば示された漢字をどう組み立てて句を創作するかを推論させる。この学習の中では、読者として「漢詩を読む」

ことと、作者として「漢詩を詠む」ことを往還させつつ、作品の情景を読み解いていく過程を楽しませる。生徒は、漢詩に描かれた風景・心情を読み取ったり、自分が作者ならば、次にどんな句を入れるだろうか推論しながら示された漢字を並べ替えたりして詩を完成させる。元の詩を正解として求めるのではなく、どういう意図で漢字(=言葉)を選択し、構成したかを考える学習を通して、漢詩の世界を身近に感じさせることができるように指導をした。

一方、B指導の生徒には中学校国語教科書の表記に準じた訓読文を示した。書き下し文の書き方を知ることによって、正確に訓読できるようになることを目指した。また、内容の理解については、意味がわからない漢字(=言葉)は辞典を用いるなどして、詩の情景をできるだけ自分の言葉で表現させながら読解を進めた。

このような指導方法の違いが、漢文の読解(訓読、意味理解)と漢文学習への関心・意欲の違いに繋がるかについて検証を行った。漢文の訓読については、本単元実施の事前(11月初旬)・事後(12月上旬)に、基礎問題(2字・3字の漢語の訓読、意味理解)

と応用問題(4字・5字の漢語の訓読、意味理解)を実施した。また、漢文学習に対する生徒の関心・意欲を、事前・事後アンケートにより検証することとした。

漢語の訓読テストに用いた問題は、次の通りである。

〔基礎問題〕

- ①日没 ②休憩 ③入籍 ④再出発 ⑤未確定

〔応用問題〕

- ①不言実行 ②右往左往 ③花開鳥鳴
④四十而不惑 ⑤有心還惜別

3 指導目標

- 漢文を訓読できるようにする
- 場面や心情を想像しながら、漢詩の情景を読みとることができるようにする。

4 指導計画(平成26年11月中旬～11月下旬)

- 漢文・漢詩の基本的な知識を学ぶ(2時間)
- 漢詩三編「登鶴鶴楼」、「尋胡隱君」、「涼州詞」を読む(4時間)

5 授業の実際(A指導)

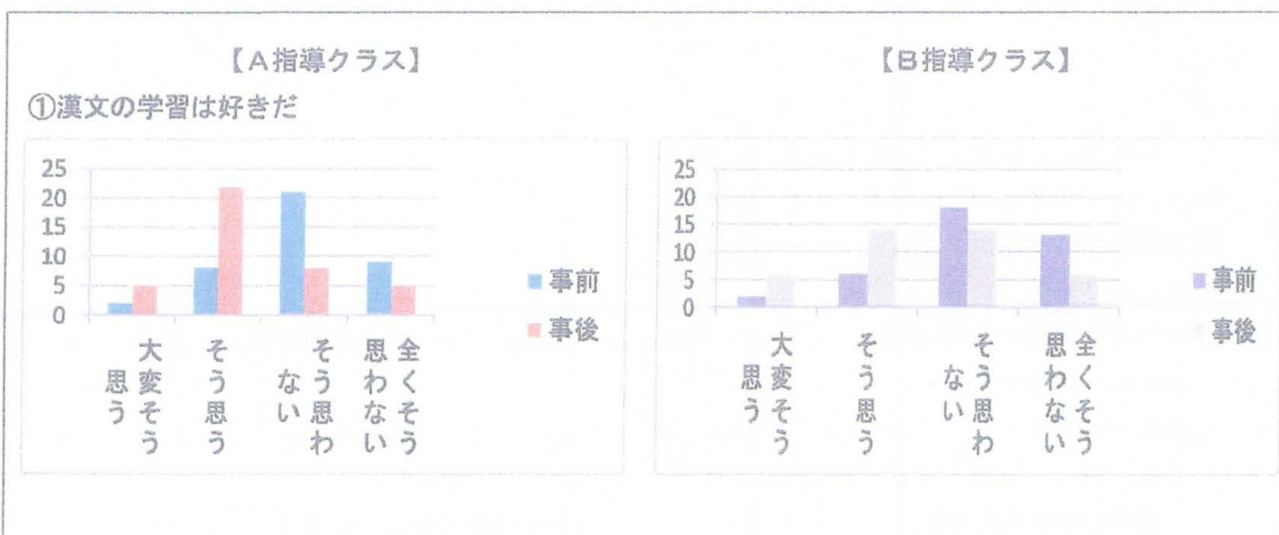
	学習活動と内容	指導上の留意点
第1時	<input type="checkbox"/> 熟語の構成に注目し、訓読しよう。 <input type="checkbox"/> 熟語の構成 次の①～③に熟語を分類する。 ①意味が似た漢字を組み合わせたもの ②意味が対になる漢字を組み合わせたもの ③上の漢字が下の漢字を修飾するもの ④上の漢字が主語、下の漢字が述語の関係にあるもの ⑤下の漢字が上の漢字の目的や対象を表すもの ⑥上の漢字が否定の意味を表すもの ⑦接頭語・接尾語がつくもの ⑧同じ漢字を並べたもの	<input type="checkbox"/> 国語を表現する文字とその構成に注目させる。 <input type="checkbox"/> 二字の熟語だけでなく、三字・四字などの熟語の例を示すことで、字数が増えても訓読する時にはこれを基本として考えればよいことに気づかせる。 <input type="checkbox"/> 特に⑤、⑥についての例を多く示し、漢語と和語の構成の違いについて意識させる。
第2時	<input type="checkbox"/> 昨年度の漢詩の学習を想起し、漢文・漢詩の基本的な知識を復習する。 <input type="checkbox"/> 漢文を訓読する際のきまりについて確認する。 <input type="checkbox"/> 杜甫「絶句」を例にして学習の方法を知る。 ・漢詩に詠まれた風景 ・作者の心情	<input type="checkbox"/> 今回は白文のまま漢詩を読んでいくことを伝える。 <input type="checkbox"/> 前時の学習(熟語の構成)と関連づけて考えるよう指示する。 <input type="checkbox"/> 当時の時代背景や作者の状況についても、詩を理解するために必要な情報は、教師か

	・漢詩（絶句）の形式ときまり	ら提示する。 ○漢詩のきまりとして、構成（起承転結）と押韻、対句（律詩）について押さえる。
第3時 ～ 第6時	<p>□前時までの学習を想起し、本時の学習目標と学習方法を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 王之涣「登鶴鶴楼」（第3～4時）、高啓「尋胡隱君」（第5時）、王翰「涼州詞」（6校時）について詩の情景を読み解こう </div> <p>□作品に描かれた場面を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつ、どこで、誰が、何をしている（またはしようとしている）のか、について詩の言葉を手がかりに考える。 ・詩の構成についても確認しておく。 <p>□作者の心情を考える。</p> <p>□作品から読み取ったことを交流する。</p>	<p>○目標を示すことでゴールの姿（＝詩の情景を読み解く）を生徒と共有しておく。</p> <p>○漢詩を生徒に示すが、承句と結句は伏せておき、漢字のみバラバラにして示す。</p> <p>○特に、第3時では学習の進め方を理解させるために、「推論する」「想像する」活動を丁寧に行う。</p> <p>○起句と転句から読み取ったことを基に、承句と結句の内容を推論し、漢字を並べ替えて句を組み立てさせる。</p> <p>○どの言葉を根拠として心情を読みとったのか、説明できるようにする。</p> <p>○詩の言葉として表現されていることと、読者が様々な想像できることを区別して鑑賞させる。</p>

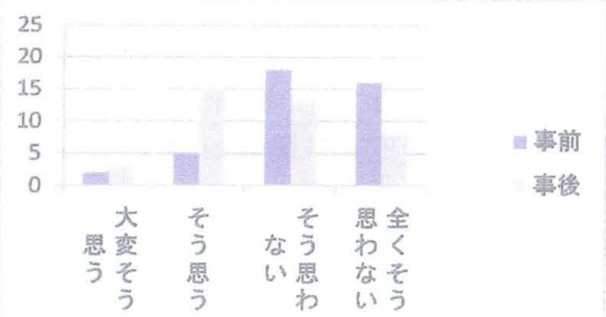
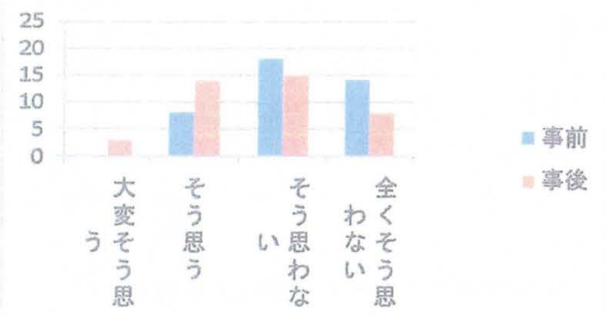
IV. 結果と考察

まず、漢文学習に対する生徒の関心・意欲が、今回の学習前後でどのような変化があったのかを、アンケートにより調査した。

学習後のアンケートの結果は、図2のようになった。A指導を中心に今回の授業実践の結果を分析する。



②漢文の学習は得意だ



③漢字から漢文の内容を推論できる

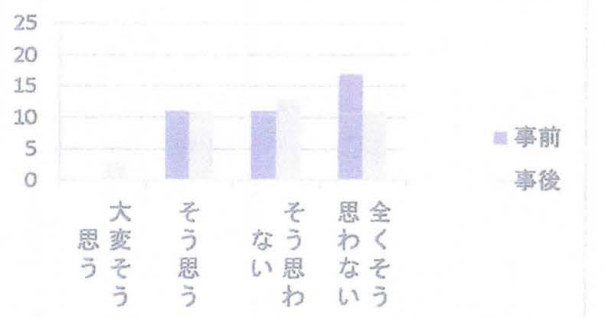
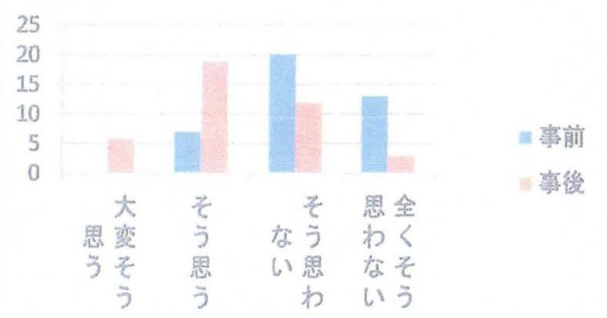


図2 アンケート（漢文学習に対する関心・意欲）の結果

これらの結果のうち、「質問①漢文の学習は好きだ」と「質問③漢字から漢文の内容を推論すること」について、A指導クラスの方が学習後に肯定的な回答（「大変そう思う」と「そう思う」を合わせたもの）に顕著な増加が見られた。

さらにアンケートの自由記述を見ると、質問①について肯定的に答えた内容は、次のようであった（複数回答あり）。

A指導クラス	B指導クラス
(1)読解に関すること 16人	(1)訓読に関すること 11人
(2)訓読に関すること 12人	(2)用語や技法の習得に関すること 8人
(3)用語や技法の習得に関すること 7人	(3)読解に関すること 5人

A指導では、漢詩を白文のまま生徒に提示している。それも、承句と結句の文字をバラバラにした状態である。それを目にした生徒が、初めかなり学習への抵抗感を示したのは昨年と同様であった。（浜岡など、2013）しかし、課題の内容や手順を理解すると、自分自身で情景を読みとったという達成感に

つながることは、昨年度の実践より結果を得ていたため、今年度も引き続き同様の指導に取り組んだ。この指導の中で大切にしたいことは、いかに作者が詠んだ言葉（＝漢字）そのものに向き合わせるかということである。

その1つ目として、単元のはじめに「熟語の構成」を組み込み、和語と漢語の語順の共通点と相違点を意識させるようにした。「『熟語の構成』の学習が、漢文を読む際に役立ったか」という質問に対して、A指導クラスの生徒の71.8%が肯定的な回答をしていた。

2つ目は訓読の際、「こう読まねばならない」ではなく、「できるだけ自由に」「意味が分かるように読めばよい」ことを折に触れて声掛けした。自分の言葉で読むことで、作者に同化し、詩の場面を想像するのを助ける。漢文訓読の整ったリズムは期待できないが、ここでは情景を読解することの方を優先させた。このことが、A指導の漢文学習への好意的な評価につながったと考える。

次に、「質問②漢文の学習は得意である」については、両クラスとも指導によってあまり差が見られなかった。生徒が「得意だ」と感じた内容は、次の

通りである（複数回答あり）。

A指導クラス	B指導クラス
(1)読解に関すること 12人	(1)用語や技法の習得に 関すること 15人
(2)訓読に関すること 8人	(2)訓読に関すること 9人
(3)用語や技法の習得に 関すること 5人	(3)読解に関すること 5人

今回、単元目標は同じように生徒に示したのだが、指導法を変えたことで、生徒が達成すべき事柄の優先順位に違いを生む結果になったことが考えられる。B指導クラスでは、初め訓読文を書き下し文に直して訓読することにしばらく時間を割いたので、このことができるようになったことに達成感を感じる生徒が多かったのではないかと考える。B指導クラスの生徒には、漢和辞典をもたせて必要に応じて引かせていたので、情景を読みとる際も漢字から自分で「推論する」活動は行わなかった。その結果、クラスで交流した際に様々な意見が出て議論するという場面は見られなかった。この点は、A指導クラスの様子と大きく異なっていた。

質問①、②の結果を踏まえて、「学習への意欲が高まったかどうか」をワークシートの記述から見る。

【A指導クラス】

- 漢字が並んでいるだけなのにいろいろな想像がわくんだなと思った。具体的に想像することはすごく大事だと思った。
- 一つの漢字にいろいろな読み方があるのはわかっていたが、動詞として読むか名詞として読むかなど、役割も考えながら読んでいくのが難しく面白かった。
- 白文を自分なりに解釈して読むと、いろいろな書き下し文が出てきた。他の人の読み方がわかって面白かった。
- 作者になったつもりで詩の風景や気持ちを読んでいくと、相手との関係やこの後の行動など、どんどん想像がふくらんでいった。
- （伏せてある句を作っていく時）筆者の気持ちをとらえるには、筆者になりきることが大切！

【B指導クラス】

- 今まであやふやなままやってきたことが、今回の学習ではっきりできて良かった。振り返り点もルールを覚えれば簡単だった。
- 漢文は難しいイメージしかなかったが、理解できるようになったので楽しめるようになった。
- 対句は漢詩で見ると構成がよく分かった。
- 対句や押韻など短い詩の中に工夫があって、それを知るのが面白かったです。
- 漢和辞典を久しぶりに使ったが、読み方や意味が書いてあるだけじゃないのに驚いた。使ってみるとおもしろい。

両クラスとも一生懸命授業に取り組み、学習後の感想は概ね好意的なものが多かった。しかしそれぞれの感想を細かく読んでいくと、B指導クラスの感想は、各々の生徒ができるようになったことを取り上げて書いており、内容は様々であった。それに対して、A指導クラスの感想では、「想像する、考える」ことを取り上げている生徒が半数程度いた。一語一語の漢字と向き合い、自分なりにストーリーを考えていくことに学習の面白みを感じている様子が分かる。このことについては、昨年度の実践でも同様の結果を得ており、漢文学習を身近に感じ、学習意欲を高める指導法の一つとして有効であったと考える。

最後に、漢語の構成を理解することが漢文を訓読することに有効にはたらく、内容理解を促すことに繋がったのかどうかを検証するため、漢語の訓読テストを実施した。基礎問題として二字・三字の漢語の訓読（5問5点満点）と応用問題として四字・五字の漢語の訓読（5問5点満点）を実施した。漢文の訓読として「言葉として意味がわかるように読んでいること」を規準とする。例えば、「入籍」の場合、「籍を入れる」あるいは「籍に入る」は正解とするが、「入れる籍」「入る籍」等は不正解とした。助詞や助動詞等で語と語を繋ぎ、その関係を捉えられているかどうかを評価の規準としたのである。漢語の訓読テスト結果は図3のようになった。

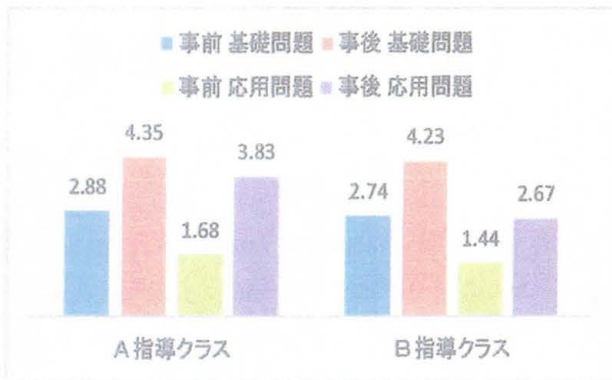


図3 漢語の訓読テストのクラス平均

両クラスとも、基礎、応用問題において事後テストの平均点は高くなっている。基礎問題は事前のテスト平均が、A指導クラス2.88点、B指導クラス2.75点から、事後テストでは、それぞれ約1.5ポイントどちらも高くなっている。あまり指導法の違いによる差は認められない。一方、応用問題については、両クラスとも、事前・事後で大きな差はなかったが、A指導クラスの方が1.68点から3.83点と、B指導クラスより、伸び幅はやや大きかった。正解できるようになることも目指すところであるが、今回、学習後の変化でもう1つ注目したのは、解答の仕方である。無解答率を事前・事後で比較すると、A指導クラスでは16.2%から4.9%、B指導クラスでは18.7%から11.3%であった。また、A指導クラスでは、不正解ではあるが助詞や助動詞を入れて語と語を繋げようとした解答が多かった。特に四字、五字の漢語を、一語ないし二語ずつに分けて意味を考えたいうえで、語順や助詞を考えながら何とか意味がわかるよう繋げることに苦心する様子は、事前テストの際にはほとんど見られなかった。

これらの結果から、漢語の構成を学習したことは、一語一語の漢字がどのような関係であるかを意識して漢文を訓読することに有効に繋がったと言える。

V. おわりに

「漢字文化」を切り口として、小・中9年間の学びをどうつなげていくのか、昨年度と今年度の2年間にわたり考えてきた。小学1年生で漢字を書くことを始めてから中学3年生までに、二千余りの漢字の読み書きを習得する。中学生ともなれば日々接する情報量も多く、文字は受信・発信をするためにも必要なツールである。しかし、漢字を単なる文字として数多く覚えることを目指すだけではなく、時にはじっくりと漢字に向き合うことで、どれだけ多くの情報を引き出すことができるかという学習をさせたいと考えた。それが「推論する」ことを取り入れた今回の漢詩の授業である。今回の実践を終えて、漢詩の奥深さ、面白さを改めて生徒とともに味わうことができた。生徒の感想に「中国人も日本人も『美しい』と思うことや『悲しい』と思う気持ちは同じなんだな、と気づいた。」とあった。この気づきこそ、漢字が作者と私たちをつないだ証しだと感じる。自己を表現する方法として、漢字を習得させていくことを大切にしつつ、同時に漢字を文化としてとらえる視点をもって古典の学習を作っていきたい。

引用・参考文献

- 浜岡恵子ほか：古典を主体的に読むための指導法の研究Ⅲ－漢和辞典を用いて文字と文化をつなぐ実践－，広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」第45集，15-23，2013。
- 一海知義：漢詩入門，岩波書店，1998。
- 文部科学省：中学校学習指導要領解説 国語編，教育出版，2008。
- 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 国語編，教育出版，2008。
- 小川環樹他：唐宋詩集，筑摩世界文學体系 8，筑摩書房，1980。
- 大上正美：唐詩の抒情 絶句と律詩，朝倉書店，2013。

A Study of Instruction to Make Students Read Classics Actively IV

-The practice of the instruction of Chinese classics with the deductive activity-

Keiko HAMAOKA and Takaharu YAMAMOTO

The purpose of this research is to inspect these two things. First, it would be effective to introduce the deductive activity into the learning of Chinese classics in order to enhance students' interest and motivation to learning. Second, understanding the structure of Chinese words would offer the effective Japanese reading of Chinese words and the comprehension of the contents. When the students try to read unpunctuated Chinese texts which were shown, the enhancement of their motivation to try to express the writer's feeling and action with their words freely by letting them have the deductive activity was found out. Besides, through the introduction of the learning to understand the difference of the structure between Chinese words and native Japanese words at the beginning of the unit, the students come to read kanji characters considering the functions as well as the meanings, which could offer the understanding of the scenes thinking of the link between words when they read unpunctuated Chinese texts.

Keywords: kanji characters unpunctuated Chinese texts deductive structure of Chinese words